

主 題：私たちは主を宣べ伝える 5

聖書箇所：コリント人への手紙第一 1章26b-28節

私たちの救いについて教えて来たパウロ、19-25節ですでに学んで来ましたが、そこで、実は、私たちは神の恵みによって救われたのだ、人間の知恵や行いではないということをパウロは教えました。そして、26節からは、私たちが救いに与ったのは実は「神の選び」によると教えます。

A. 神の恵みによる救い 19-25節

B. 神の選びによる救い 26-31節

1) その意味 26a節

26節「兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらん下さい。」、私たちは神によって召されたのだと、前回、それを「有効召命」という神学的なことばを使って、神が成してくださった救いのみわざを学びました。恐らく、皆さんにとって暗唱するべきみことばの一つと言えるのはⅡテモテ1:9です。「神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、」、すばらしいと思いませんか？まさに、私たちが今教えられている通りのことがここに要約してパウロが記しています。こうして私たちは救いに与ったのです。救いは神のみわざです。神が私たちの心に働くことによって、神はその人に自分自身の罪を示してくださいました。同時に、こんな自分を愛してくださった主の愛に感動と感謝を覚えます。そして、主を心から、何ものよりも愛したいという思いをもって信じ受け入れていくのです。これはすべて神の恵みのみわざです。

前回見たように、私たちはイエスを信じたなら何をいただくのか？ではなく、イエスが私たちを救いに招かれたときに私たちに問われたことは、私たちがこの世のすべてのものよりも、あなたの財産よりも、あなたの家族よりも、そして、あなた自身よりも「わたしを愛するか？」です。これが神が私たちに問われていることです。旧約の時代から新約の時代に至って、すべての時代にあつてすべての人に神が問われていることは同じです。「あなたはこの世のいかなるものよりも、自分自身よりもわたしを愛するか？」です。そして、私たちは神の恵みによって「はい、私はあなたを愛します。」と言って、主に従う選択をしたのです。これはすべて神の恵みであると。このように神は私たちを新しく生まれ変わらせてくださった、造り変えてくださったのです。

2) その対象 26b節 (人間の選びと神の選び)

今日は26節の続きを見ていきます。「この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。」、パウロはこうして神の選びの対象について話を進めるのです。というのは、ここに描かれている人たちは、人々が人間的な尊敬を払っている人たちです。また、本人たちも「私たちは自分たち以外の人々より遥かに優っている」と自負している人たちです。パウロは敢えて、この人たちを挙げることによって、大切なレッスンを教えるのです。それを見る前に、皆さんに見ていただきたいのはここに書かれている人たちのことです。「この世の知者」「権力者」「身分の高い者」とはどんな人たちでしょう？

(1) この世の知者 : 「この世」とは「罪の性質、人間の基準」という意味です。注目いただきたいのは「の」という前置詞ですが、ここにしか使われていません。日本語では「~の」でたくさんありますが、ここで使われているギリシャ語はこの文脈の中ではここだけです。これは直訳すれば「~によれば」ということです。

そして、「知者」はもう見て来ました。「賢明であり博識の人」です。でも、「知者」と呼んでいるのは神ではありません。「この人たちは賢明な人だ、博識の人だ」と呼んでいるのはこの世の人たちです。ですから、「この世によれば、この世の基準に基づけば、人間の基準で言えば、知者である人たち」と、そのように人々から呼ばれている人たちです。

(2) 権力者 : 権力や影響において重要とされている人たちです。権力のある人、また、その影響力において大変重要だと思われる人たちです。

(3) 身分の高い者 : このことばの通り「高い地位を得ている人」、また、「その生まれが高貴な人」、そういう意味のあることばをパウロは敢えて使っています。

この(2)と(3)は、社会的地位のある人、指導的立場にある人たちです。レオン・モリスはどのように説明を加えています。この世の人々から大変知恵があるとされている人たち、この社会にあつ

て地位が高く、また、生まれが高貴で、そして、人々に影響力のある人たちです。まさに、人間が言う「エリート」です。

パウロはこの人たちが実際に存在していることを認めています。ご覧いただくと「この世の知者は多くはなく、」ということばが繰り返されています。パウロがこの人たちが敢えてここに挙げているということは、確かに、この人たちはこの世からは称賛されているかもしれないが、だからと言って、彼らが救いに与ることにはならないと言いたいからです。たとえ、この世のすべての人々が「知者」と呼んでも、また、この世で最も高い地位を得ていて、非常に多くの人々に影響を及ぼす力をもっている、神は神に逆らい続けるこの人たちのことを何と呼んでいるのか？「愚か者」と呼ばれます。なぜ、この人たちが神の前に愚か者なのか？それは、彼らは神の前に心を開こうとしないからです。

この人たちの問題は「自分たちには救いは必要ではない！」と、救いの必要性を認めないことです。不思議なことに、それでいて何かを崇拜してはいるのです。この人たちに共通していることは何か？彼らの関心は、人々の目であったり、この社会での評判であったり、また、この世において成功を収めることで、この地上のことしか考えていません。自分たちの知恵や力で達成した、また、達成すること、そこにしか関心を払っていないのです。

実際に、パウロがこのように言います。ピリピ3：19「彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。」と。彼らは「キリストの十字架の敵として歩んでいる…」（3：18）、イエス・キリストの救いに全く心を開こうとしない、イエスが十字架で備えてくださった完全な救いを否定し続けている人たちです。パウロはその人たちに対して「彼らの最後は滅びです。」と言います。「…彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。」と、この地上のことしか考えていません。どうすればこの地上においてもっと宝を積めるか？どうすれば地上で楽しく生きることができるか？どうすれば自分をもっと満足させることができるか？と、地上のことしか考えていません。この人たちは救いの必要性を認めないのです。

救いは自分たちではなく、もっと弱い人たちに必要だと言います。救いを必要とするのは自分たちではなく、もっと罪深い人たちだと。そこでパウロはこのような人たちのリストをこうして挙げたのです。思い出してください。パウロはこの手紙をコリントのクリスチャンたちに宛てて記しています。残念なことに、パウロが去った後、教会の中には偽りの教師たちが入り込んで来ました。イエス・キリストの福音を信じるだけでは不十分で、人間の知恵が必要だ、福音+何かが必要だと、そういうことを教えたのです。そこでパウロは、そのようなことを教えている人たちに対して、確かに、彼らは人々から知恵ある人と言われているかもしれない、社会的に地位があるかもしれない、でも、悲しいことに、彼らは神の前に愚か者であり、彼らはこの救いに心を開ざして、救いとは全く無関係であると言うのです。

こうしてパウロは、読者たちに、救いに与っているのに惑わされている人々に、もう一度真理に立ち返って来るようにと教えるのです。大切なことは、この後見ていきますが、本当の自分の姿を知ることです。この人たちは本当の自分の姿を分かっていたのです。彼らがしていることは周りの人々と自分を比較することです。「私はあの人よりも知恵がある、あの人よりも成功している」と、一度も彼らは神の目で自分を見ることはないのです。もちろん、それは神のみわざですが…。心を開こうとしない者たち、このような人たちが教会の中に入って来て人々を惑わしていたのです。

そこで、パウロはそのことを明らかにした後で、27-28節で「神が選びを与えたその目的」について教えるのです。

3) その目的 27-28 a 節

パウロは読者たちに言います。神はなぜあなたがたを選んだのか？その目的を教えてください。27-28 a 節「:27 しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。:28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。」、ここで注目していただきたいのは「選び」と「はずかしめる」という二つの動詞です。「選び」が3回、「はずかしめる」が27節に2回出ています。それが非常に大切なのです。

(1) 選ばれた人々 : 「選び」、神はどんな人を選んだのか？もっと言えば、コリントの教会のクリスチャンたちはどのような人たちだったのか？パウロはそのことに触れます。

a) この世の愚かな者 = 明らかに、これはこの文脈の中で「知恵のある者」と対比していることが分かります。恐らく、知恵のある人たちからすれば全く関心を払うことのない人たち、特に、このギリシャにおける哲学者たちは、自分たちの知性を満たす話やそのようなものを提供してくれる人に関心を示して、一般の人たちには関心を示しません。一般の人たちが彼らのところに出かけて彼らから話を聞いたからです。自分たちの好みの哲学者を選んだのです。自分たちの先生だと。

パウロは言います。あなたがたは「愚かな者」だと。なぜ、このようなことばを使ったのか？よく考えてみると、私たちも同じように、神の真理が全く分かっていなかったのです。確かに、この世のいろいろなことについて多くのことを知っている人たちがいます。でも、問題は、一番大切な神を知っているかどうかです。この世のすべてのことを知っていたとしても、高いIQを持っていたとしても、それがその人を救いへと導くなら価値があります。でも、みことばは人間の知恵は人を救いへ導かないと言っています。神の前に価値ある知恵は、私たちの創造主なる神を知ることです。神の前に価値ある知恵とは、神のみこころを知ることです。私たちはそれらを全く知らなかった。まさに、愚かな者だったのです。私たちはどこから来たのか？これからどうなっていくのか？この世がどうなっていくのか？神とはだれなのか？そのような真理について全く知らなかった。確かに、私たちはコリントの人たちと同じように「愚かな者」です。

b) この世の弱い者 = これは「強い者」と対比します。権力者です。「弱い」ということばは「からだ弱い、霊的に弱い」とそういう意味でも使われます。「弱い、無力である」と。確かに、私たちもそうです。パウロがコリントの人たちに「あなたがたは弱い者だった」と言いましたが、それは「あなたがたは自分で自分を救うことが出来なかった」からです。私たちも同じです。どんなに力があっても、私たちは自分を新しく造り変えることはできません。新しく生まれ変わらせることはできません。私たちは自分を救うことはできなかつた。ですから、私たちは確かに「弱い者」です。

c) この世の取るに足りない者 = これも「身分の高い者」と対比します。「取るに足りない者」という形容詞は「無意味な、つまらない、劣っている、卑しい」という意味のことばです。身分の高い者は全く反対です。

d) 見下されている者 = 「権力者、尊敬に値する人」に対比します。この「見下されている者」は動詞です。面白いのは、「愚かな者」も「弱い者」も「取るに足りない者」も全部形容詞で、「見下されている者」だけが動詞で、しかも、この動詞は完了形が使われています。ということは、このように見られていたし、今現在もそのように見下され続けているということです。軽蔑されていた、軽んじられていた、無きもののように扱われていたのです。大切なものとして見られていなかったのです。

パウロがここで敢えて言わんとしたことは、ここに挙げられた四つの特徴を見たときに、恐らく、皆さんひとり一人もそのような存在だったとどこかで気付かれたことがあるはずで、愚かな者で真理が全く分からない。自分で自分を救えない弱い者、全く取るに足りない者、悲しいことに、神の前に価値ある人生を送って来なかつた。でも、そのようなコリントの人たち、そして、私たちを神は選んでくださったのです。知恵ある者でも力がある強い者でもなかつたのに、却ってそうでない私たちを神は選ばれたのです。

このように言うと、では、神は知者であったり権力者であったり、身分の高い人を選ばれないのでしょうか？そうではないことは皆さんご存じですね。パウロがアテネに行ったときのことを思い出してください。ある哲学者はパウロの話聞いて、特に、復活のことを聞いたとき、みなあざ笑って「このことについては、またいつか聞くことにしよう」（使徒17：32）と言ってその場を去っていきました。でも、

「アレオパゴスの裁判官デオヌシオ、…」がイエス・キリストを信じたことが記されています（使徒17：34）。また、ニコデモはどうですか？彼はユダヤ人の中の霊的指導者でした。非常に重要な教師だった。また、パウロはどうですか？ローマの市民権を持ち、しっかりしたユダヤ教の教育を受け、行いはパリサイ人で非難されるところのない人物でした。

ですから、確かに、神はこのように知者や権力者、身分の高い人たちを選んで来られました。彼らは神の前に謙虚だったから…。でも、ここに挙げられている人たちは決して神の前に謙虚にはならなかつた。自分自身に自信があつたのです。だれでも神の前に謙虚に救いを求めて出て来るなら、神はその人を救われます。身分も地位も関係ありません。国籍も人種も…。神が選んでくださった「愚かな者」と言われる人たち、身分の高い人たちからは全く目にも留められない者たちを神は選んでくださった。そんな私たちを神は選んでくださったと、パウロは言います。

(2) 彼らを選ばれた目的

その上で、この人たちが選ばれた目的についてパウロはこのように言います。27節に繰り返されています。「しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。」と。この「はずかしめる」ということは「彼らが面目を失う、彼らが恥ずかしい思いをする、彼らに恥をかかせる」という意味があります。

・「知恵のある者」 : 自他ともにそう思っているのでしょうか。周りも自分自身もそのように思っているのです。

・「強い者」 : 自分には能力がある、自分はどんなことでもできると、そのような思いを抱いている人です。

パウロは言います。そうでない人が救われたのは、この人たちをはずかしめるためだと。自分は他の人に比べて遥かに優っていると、そのように自分自身を過信し、自分には救いは必要ではないと思っているこの人たちに対してパウロは、神はこの人たちをはずかしめるためにそうでない私たちを選んだと言うのです。神はこの知者や権力者である人たちに何を為さそうとしておられたのか？彼ら自身の選択、彼らの考えが間違っているということに気付かせようとするのです。ですから、神は彼らのようでない私たちを選んだと。そのことがこの27節に記されているのです。

このように見た時、神に対して心を閉ざしている人たち、神に対して非常に頑なになっている人たち、まさに、ここに記されている人たち、イエス・キリストを信じるだけでは不十分であって知恵があると、そのような行いによる救いをもたらすような偽りの教師たち、神は彼らを瞬間に滅ぼすこともおできになった、でも、神はそう為さらずに、この人たちにも悔い改めの機会を与えてくださったのです。彼らは気付くことが必要だったのです。自分たちは自分たちの知恵が救う、自分たちの力が自分たちを救うと、そのように思い込んでいたからです。でも、神の救いを見たときにそうではなかった。自分たちは間違っていたと、そのことに気付かせようとして、神はコリントのクリスチャンたちを、そして、私たちを選ばれたのです。人間がもつ自尊心はその人を救いから遠ざけていきます。私たちに必要なことは神の前に謙虚になることです。そして、神はそのように私たちのうちに働かれます。

28節を見てください。「また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。」「有るものをない者のようにするため、」と、これは訳すのが非常に難しかったと思います。というのは、ギリシャ人たちにとっては自分たちは「有るもの」だと信じています。その「有るもの」を「ないもの」のようにする、「無に等しいものにする」と言います。この「ないもの」ということばは「無価値にする、だめにする」という意味があります。「ないもの」とか「無に等しい」というのは奴隷に対する呼び方だったのです。ギリシャ人にとって自分たちがそのように呼ばれることは屈辱的だったのです。彼らは自分たちは「有るもの」だと信じていた。ところが、パウロは「あなたがたは『ない者だ』」と言います。

だから、先ほどから見てるように、彼らは「私は知恵ある者だ、私は力がある」と自分の行いで救いを得ることが出来ると思っているのです。その人たちに対してパウロは、「あなたがたは気付かなければならない。そこには何もないということに気付かなければならない。」と教えるのです。こうしてパウロは、プライドに溢れた、自尊心に満ち溢れた彼らに「あなたがたが救いに与るためには神の前に砕かれることだ」と言うのです。そのことを教え続けて行くのです。「へりくだる」ということ、それがパウロが彼らに教えようとしたことです。

皆さんに思い出していただきたいことは、皆さんが救いに与るときに皆さんは自分が神の前にどれ程罪深い者であるか、そのことを神から知らされたはずです。もし、皆さんが「私は隣の〇〇さんよりもあの人よりも優れている」と思っていたなら、自分の救いを考え直さなければなりません。神があなたのうちに働かれるとき、あなたはだれかと比較することを止めます。神が働かれるとき、あなたは神がご覧になっているあなたの本当の姿を、裸のあなたを見せられます。

私たちはよく「アメイジング・グレイス」という曲を賛美します。ジョン・ニュートンが書いた曲であることは皆さんもご存じです。彼は1748年3月21日、大変な嵐に遭遇しました。だれも経験したことのない大変な嵐でした。約2週間近くにも及んだと言います。みな自分たちはこの嵐に溺死すると死を覚悟しました。そのような状況の中で、ジョン・ニュートンは幼いころから彼の敬虔な母親によって教えられたみことばを思い出すのです。彼の母親は彼が7歳になるほんの数日前に召天したのです。ですから、その後の彼の生活は残念ながら神を敬うものではありませんでした。奴隷売買の商人として、神が喜ばれないことをしていたのです。

でも、その嵐の中で彼が思い出した聖書のみことばは箴言1章です。読みます。1:24-31「:24 わたしが呼んだのに、あなたがたは拒んだ。わたしは手を伸べたが、顧みる者はない。:25 あなたがたはわたしのすべての忠告を無視し、わたしの叱責を受け入れなかった。:26 それで、わたしも、あなたがたが災難に会うときに笑い、あなたがたを恐怖が襲うとき、あざけろう。:27 恐怖があらしのようにあなたがたを襲うとき、災難がつむじ風のようにあなたがたを襲うとき、苦難と苦悩があなたがたの上に下るとき、:28 そのとき、彼らはわたしを呼ぶが、わたしは答えない。わたしを捜し求めるが、彼らはわたしを見つけない。:29 なぜなら、彼らは知識を憎み、【主】を恐れることを選ばず、:30 わたしの忠告を好まず、わたしの叱責を、ことごとく侮ったからである。:31 それで、彼らは自分の行いの実を食らい、自分のたくらみに飽きるであろう。」と、これが彼が幼いころから教えられて来た、そして、思い出したみことばです。

このときから神は彼の心に働くのです。まさに、生きるか死ぬかというその状況な中で、すべての人間的な希望が失われたその状況にあって、彼は一冊の新約聖書を見つけます。そして、それを開いて読んだ箇所がルカの福音書 11 : 13 です。「してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さないことがあります。」と、この箇所を読んだとき彼は、こんなどうしようもない私だけれど、神は私の祈りを聞いてくださったと、その確信を得るのです。そして、彼はイエス・キリストの救いに

与るのです。自信家だった彼、でも、神はその自信を砕かれるのです。

ですから、彼が 1772 年にこの詩を書くのですが、「信じがたい恵み 何と美しい響きだろうか 私のような哀れな者を救ってくださった かつて私は失われた者だった しかし、今は救いに与った かつては霊的に盲目だった しかし、今は心の目が開かれた 今、私の心に神を恐れることを教えたのは神の恵みだった そして、神の恵みは私の恐れを取り除いてくれた」と、いろんな思いがこの歌詞には含まれています。そのことは容易に察することができます。6 番の歌詞は「やがて大地が雪のように解け、太陽が輝くのを止めても、私を召された主は永遠に私のものだ」と、そして、7 番「一万年経とうとも、太陽のように光り輝き、最初に歌い始めた時以上に、神への賛美を歌い続けよう」と。

彼の心の中に神が働かれて、彼は自分自身の本当の姿を見るのです。神を喜ばせることの全くない罪に染まった自分の姿を。永遠の滅びに至ってしかるべき自分の姿を。自分で自分を救うことの出来ない自分の無力さに、その愚かさに彼は気付かされるのです。私を救うことができるのは、私を造ってくださったこの神だけだと、その方に彼は希望を置くのです。神の前にへりくだる者たち、その者たちは神に見捨てられることはない。彼は神の前に砕かれ、そして、神に救いを求めたのです。

皆さん、思い出しませんか？ふたりの人が宮に上って神に礼拝をささげます。一人はパリサイ人でした。彼は神の前に立って心の中でこんな祈りをささげたとルカ 18 章で教えます。18 : 11-12 「…『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。』と、**12** 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』と、「神さま、どうか私を見てください。私が何をしているか見てください。私は感謝します。ここにいる人たちと比べて私は遥かに優っている。」と、非常にプライドの高い祈りです。自分を義人とし他の人たちを見下していました。確かに「私の行ないを見てください」と。

そこにもう一人いた取税人は 13-14 節「:13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』 :14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」、この取税人は神殿から遠く離れていました。そこに立つ資格は自分にはない、この聖い神の前に立つ資格は自分にはないと、目を天に向けようとしなかった。神が臨在されているその天に目を向けるその資格は自分にはないと思ったのです。彼は「自分の胸をたたいて」と、これは悲しみの表現です。何と自分は罪深い者か、そのことを神によって知らされた彼は胸をたたきながら、悲しみの中で「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。」と言います。この人が救われたのです。

ですから、今日のレッスンの中で私たちが教えられていることは、まさに、今私たちが見て来たように、このような偽りの教師たち、また、このような人たちはどの国でもどの時代でも存在します。自分自身に自信を持っている人たち、神を必要としない人たちです。そのような状態であるなら、どんなに福音のメッセージを聞いたとしても彼らはその救いを受け入れようとしません。「私には間に合っています。私には救いは必要ではありません。」と…。しかし、自分の罪深さを神によって気付かされて、そして、神の前に謙虚になって救いを求めていくなら、あわれみを求めるなら、神はその人に救いを与えてくださるのです。

今日私たちが見て来たのは皆さん、この世の愚かな者を神は選ばれた、この世の弱い者を神は選ばれた、この世の取るに足らない者や見下されている者を神は選ばれた。パウロが教えたかったことは、初めにも言ったように、コリント教会の人たちに「あなたがたはこのような人々だった」ということです。そして、そのメッセージは私たちに対しても同じことを問い掛けるのです。「あなたは自分がこのような存在だということを心から認めますか？」と。「あなたは全く神の真理が分からずに生きていた愚か者であった、自分の力で自分をどうすることもできない、自分を変えることもできない、そんな力のない弱い者であった。神の前に、神に背き神に背を向け神が忌み嫌うことを平気で行ない、神の前に全く価値のない者であった。取るに足らない見下される存在であった。」と、つまり、私たちのうちには何一つ神の前に「神さま、これを見てください」と誇れるものはなかったのです。

ただ捨てられる汚れたカビが生えた、どうしようもない、ただ燃やすしかない、そのような者に過ぎないとイザヤは教えます。汚れ切った私たち、だから、パウロはこうしてコリントの人たちに「あなたがたはこのような者だったが、神はあなたがたを選んだのだ。だから、今あなたがたは救われているのだ。それなのに、なぜまたそのように知恵などに戻ろうとするのか？神があなたがたを選んでくださったからこの救いに与ったのだ。」と、もう一度、彼ら自身がイエス・キリストを信じたときに神の前に謙虚であったようにと、パウロは彼らの心に働き掛けるのです。

救いに与ったひとり一人、どの時代であっても、神はそれぞれのうちに働き、それぞれに自分自身を明らかに示し、それぞれの心を砕いて救いへと導いていかれるのです。思い出してください。イザヤは神によって大いに用いられた預言者ですが、その働きに就く前に彼は何を体験したのか？憶えておられるでしょうか？イザヤ書6：1「ウ ज्या王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。」と彼は神を見たのです。そのときに、この聖なる神の前にあってイザヤはこのように言います。6：5「そこで、私は言った。「ああ、私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」、神の前で彼の心は砕かれたのです。彼は自分の本当の姿をここで覚えるのです。私は本当にくちびるの汚れた者だ、この聖い神の前に立つことのできない者だと。ご存じのように、この後イザヤは聖められるのです。8節「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう」と言っておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」と。

ヨブはどうでしたか？ヨブ記42：5-6「5 私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。6 それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔いています。」と述べています。神の前に自分がどんな姿なのかをヨブも気付かされたのです。新約の時代になって、パウロもそうでした。Iテモテ1：13、15「13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。…」と、自分がどのような者なのかを神によって気付かされたのです。そして、こう言います。「それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。…15「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」と、パウロは心になくことを語ったのではありません。彼は心にあることを語ったのです。数ある罪人の中で、この世界中の罪人の中で、私ほど罪深い者は他にはいないと。あのパウロが…です。だれかと比較するのではない、神が自分をどうご覧になっているのか、それを見たときにパウロが言えたのは「私はその罪人のかしらです」でした。

ペテロはどうでしたか？ペテロたちは一晩中漁に出ました。何も獲れませんでした。ある者は網を洗い始めたのです。その時にイエスはその一つのシモンの船に乗って、シモンとは後のペテロですが、そして、少しだけ陸から漕ぎ出すようにとシモンに命じているのです。そして、そこでイエスは群衆に教えます。話が終わった後、シモンにこう言うのです。ルカ5：4-8「4…「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい」と言われた。」5するとシモンが答えて言った。「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。でもおことばどおり、網をおろしてみましよう。」6そして、そのとおりにすると、たくさんの魚が入り、網は破れそうになった。7そこで別の舟にいた仲間の者たちに合図をして、助けに来てくれるように頼んだ。彼らがやって来て、そして魚を両方の舟いっぱい上げたところ、二そうとも沈みそうになった。8これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」と言った。」、お気付きになりましたか？

救いに与るとき、神はその人のうちに働いて、それぞれがどんなに神の前に罪深い救いに値しない者であるかを示されるのです。旧約の時代も新約の時代も…。みことばはあなたや私に対してこのように言います。エペソ2：1、3「1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、…3「私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」と。これが私たちなのです。これがあなたなのです。生まれながらの私たちは神の前に神の怒りを受けるべき者であったと。でも、神が私たちを選んでくださった。そして、この救いへと招かれたのです。

信仰者の皆さん、今日のみことばの中で、パウロは神がコリントのクリスチャンたち、そして、私たちを選ばれたのは、キリストの救いを拒み続けている人たちに彼らが間違っていることを示して、彼らが自分たちの間違いに恥じ入ることが目的だと、そのことを見て来ました。神に背を向けている人たち、神に逆らって人たちが「私たちは間違っていた。この神こそが真の神であり、この方こそが真の救い主だ」と、そのことに気付くために、彼らはずかしめるために、彼らに恥をかかせるために、そのために選ばれたということです。

ということは、皆さん、あなたにも私にも大変大きな責任があると、そのことに気付かれませんか？彼らが間違っていることに気付くように、それが私たちに課せられた大きな責任です。どうすればいい

のか？イエスかノーかで考えてください。あなたも、そして、私たちクリスチャンは神から本当の幸せをいただいた者たちなのかどうか？私たちクリスチャンは神から本当の満足を得た者なのかどうか？私たちは主の喜びをいただいた者なのかどうか？私たちは主から主の平安をいただいた者なのかどうか？全部「イエス」ですね。では、そのように生きることです。私たちはこの世に人たちがどんなに努力をしても、人間の知恵や力によって得ることのできない幸せをもらったのです。それなら、そのように生きることです。私たちが本当の満足を得たと言うのなら、そのように生きることです。物があってもなくても構わない。私たちには神がいてくださる。その方が私たちに満たしてくださるのでしょうか？貧しい中にある道も知っており、豊かさの中にある道も知っている。また、飽くことにも飢えることにも、また、富むことにも乏しいことにもあらゆる境遇に対する秘訣を心得ている。どんな時でも私たちは満足しているのです。神がともにいてくださるからです。私たちはイエスが持っておられる喜びをいただいたのです。私たちはそれを示すことです。

もし、私たちが愚痴を言い文句を言い不満ばかり言っていたらどうですか？人の悪口しか言っていないなら…。私たちは神の平安をいただいたのです。それを示すことです。その時に彼らは気付くのです。知恵を求めている者たち、成功を求めている者たち、この世で高い地位を得ようと努力している者たちが気付くのです。ここには自分たちが求めているものがないことに…。それはイエス・キリストのみ、イエスだけがそれを与えてくれると気付くのです。

彼らはずかしめるために私たちは選ばれたのです。もし、私たちがこのような祝福をいただいたと、そのように言うだけでなくそのように生きるなら、いいですか！クリスチャンの皆さん、あなたへの祝福は神がそのように助けてくれることです。私たちは神がくださる本当の幸せを得たのです。そのように生きるには神の助けがいます。どんな時にでも満足して生きる、神の助けがいます。喜びを持って生きる、神の助けがいます。平安を持って生きる、神の助けがいます。神の助けをもらいながら私たちが歩んでいくときに、この世のすべての人たちが絶対に自分たちの知恵や力によって得ることのできない祝福を得ていることを世に示すことになるのです。

私たちにキリストを紹介してくれた人たちは弁の立つ人だったのか？そういう人もいたかもしれませんが。でも、この私にキリストを紹介してくれた人は見せてくれました。この人のうちにあるものは私のうちにないことを…。それが私たちの務めです。ジョン・ニュートンは82歳で天に召されるその時まで福音を語り続けました。彼のからだは衰え始めたとき、恐らく、天に召される前でしょう。彼は次のようなことを言っています。「私の記憶は殆ど失われた。しかし、私は二つのことを覚えている。それは私は大変な罪人だということ、そしてもう一つは、キリストは偉大な救い主だということ。」と。この二つのことを彼は絶対に忘れなかったのです。

忘れていませんか、皆さんは？あなたはこの世で最も罪深い者であること、救いに値しない者であることを。そして、神が一方的に働いてあなたを救ってくださった。この方は最も偉大な救い主です！この方は神です！そんな方が私たちにこんなあわれみを示してください。これがジョン・ニュートンの動機だったのです。40数年間に渡ってキリストの福音を語り続けた動機、それは「私はどうしようもない罪人であり、神は最もすばらしい救い主だ。」でした。

そのことを覚えながらこの一週間しっかり歩いていきましょう。神はあなたや私をしっかり用いてくださって、私たちを通して神のみわざを成してくださいませ。